藤村全集

第十六卷

藤村全集

第十六卷

筑摩書房版

藤村全集第十六卷

昭和四十二年十一月三十日發行

著者　島崎藤村

發行者　竹之內靜雄

發行所　東京都千代田區神田小川町二ノ八
株式會社　筑摩書房
電話　東京(291)一七六五一(代表)
振替口座　東京四一二三番

第十六卷　目次

初期作品集

「女學雜誌」時代

明治二十五年

フランセス、ウイラードを訪の記……五
人生に寄す……八
ビーコンスヒールドの妻……一三
詩人ミルトンの妻……一五
小說の實際派を論ず……二〇
元祿時代の韻文……二七
イーブを懷ふ……二四
ヂッケンスが其兒に與ふるの書……三七
落柿舍先生挽歌……三八
嵐雪が芭蕉の墓に謁でし辭……四〇

詩人バイロンの母……四一
甌北が李太白を評するの一節……四五
僧ルーサーの母……四七
西行詠花詞十八首……五二
ジョーヂ、エリオット小說中の女主人公……五四
紅樓夢の一節……五七
郭公詞……六〇
ワシントンの母……六五
洗濯の敎……六九
隨園詩話の數節……七二
源氏明石の一段……七五
夏草……七九
故人……九四

「文學界」時代

明治二十六年

別離……九九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

悲曲　琵琶法師……一〇〇
六子に寄するの詩……一二三
バイロンをあはれみて　戸川棲月に寄す……一二三
北村透谷に寄す……一二四
禿木子に寄す……一二五
夕軒に寄す……一二五
撫象子に寄す……一二六
暗光廬天知に寄す……一二六
石山寺へ「ハムレット」を納むるの辭……一二七
馬上、人世を懷ふ……一二八
かたつむり……一二九
訪西行庵記……一三四
人生の風流を懷ふ……一三五
悲曲　茶のけぶり……一四六
刀鍛冶、堀井來助……一七二
茶丈記……一七四
朱門のうれひ……一七八
なりひさご……二一七

我宿の花……二三九
紅　葉……二三〇
硯友社……二三〇

明治二十七年

草　枕……二三六
野末ものがたり……二四五
魂　祭……二五〇
月……二五六
「無　題」……二六一
山家ものがたり……二六三
蟬……二七二
アンゼロ……二七三

明治二十八年

歌反古……二九二
葛の葉……二九八
村居謾筆……三〇九

二本榎……二二三
ことしの夏……二二三
新しき星……二二三
青　草……二二四
若　鮎……二二五
別　離……二二六
芍　藥……二二七
蝶と花……二二八
木曾川の猿……二二八
野の花……二二九
與作の馬……二三〇
藍染川……二三三
醇粹なる趣味……二四三
韻文に就て……二四五

明治二十九年

新婚祝歌……二五二
月　光……二五三
香川景樹の日記……二五七

夏の夜……二六三
草影虫語（内未收錄篇）……二六九
新泉……二六九
小田原海濱に遊ぶ……二七〇
友のうへをいたむ……二七一
一葉舟（内未收錄篇）……二七二
ゆふまぐれ……二七二
蓮花舟……二七三
涙……二七四
天の蝶……二七四
芙蓉峯を讀みて……二七六
歐洲古代の山水畫を論ず……二七九

明治三十年

河北新報を祝す……二九二
告別の辭……二九四
四つの袖……二九八
雅號由來記……四一七

うたゝね……四八八

明治三十一年

告別の辭……四八五

「文學界」以後

明治三十一年

猿曳……四八九
夏の夢……四九三
朝の歌……四九三
この夕……四九四
夏の歌……四九五
綠の蔭……四九七
故徑……四九八
蛙の聲……四九九

明治三十二年

獨樂賦……五〇一

無署名篇

パーネルを弔す……五〇五
ヘンリー、サマーセット女史を訪ふ……五〇七
ジョージ、ミラーの報告を讀む……五一〇
日東の美術……五一一
日東の粧飾術……五一三
震災に於る日本人……五一三
アブラハム、リンコンの母……五一五
鴨長明とウォイヅヲルス……五一九
妾が良人ビーチャル氏……五二一
スーンデルバイ、パワー……五二五
故俳林の二女……五二九
詩人ブローニング女史の故家……五四一
百蟲譜……五四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

皐月姬……五五〇
蓼花巷記……五五二
袋　贅……五五三
吊不幸文……五五四
教育卑見……五五五
月見賦……五五七
園　女……五六〇
阿佛尼詠詞十八首……五六一
其角雜吟三十七句……五六三
秋風一葦……五六五
解　題……五六七

初期作品集

「女學雜誌」時代

明治二十五年

萬國婦人禁酒會々頭

フランセス、ウイラードを訪の記

余曾て「エバンストン」に赴きてウイラードを其「清閑亭」に訪れしことありしが結搆澹洒にして亭前の綠楡殊にめでたく清閑幽逸の風趣いはん方なかりし始て「シカゴ」婦人禁酒會に相見しとき余は先づ女史の謙讓博識にして大量なるを悅びしが其家に招かれて、とうとき母堂の天姿に接し渠等の殷勤なる談話を聽て其たのしきさまを忘るゝとなし。女史曾て「エバンストン」女學院に熱情の敎諭なりしが今は世の禁酒界に覇者として其企圖いづこに終るといふことを知らず夫れシャフツベリー侯は廿年あまり小童勞役場に反對して運動をなし暗澹たる山坑の下もしくは窒息せる陋室の內小童を酷使する慘狀を世に告げて、くり返し〳〵其饑渴劇勞に迫りいとけなふして鬼籍に入ることを警醒するに果は英國の人之を聞くに飽く迄とはなりぬ、されば侯の事業は何時とゞむ可きやと人の問ひしに斯害毒の除かるゝ迄は底止するの期あらずといひけるとかやウイラードは今日之に等しき答をなせり。酒を賣るものは丈夫を奴隷に下し子女を廢物となすといふ、左れど其警語は今や人の耳に慣れたり上下の社會は禁酒家のいふところ多く當時の習慣に關係あるを見て其議論に好意を示さゞることあり女子が道德の問題に吻を容る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com